

【短 報】 野生動物

北海道道東の厚岸湖・別寒辺牛湿原内および周辺域に生息する
肉食獣の寄生虫保有状況谷口 萌¹⁾ 澁谷 辰生²⁾ 浅川 満彦³⁾

1) 酪農学園大学獣医学群獣医学類 感染・病理学分野獣医寄生虫病学ユニット (〒069-8501 江別市文京台緑町582番地)

2) 厚岸水鳥観察館 (〒088-1140 厚岸郡厚岸町サンヌシ66番地)

3) 酪農学園大学獣医学群獣医保健看護学類 獣医寄生虫研究室 (〒069-8501 江別市文京台緑町582番地)

要 約

2017年7～11月に、厚岸湖・別寒辺牛湿原内で交通事故死あるいは有害捕獲されたアカギツネ *Vulpes vulpes*、ノイヌ *Canis Linnaeus*、ノネコ *Felis catus*、タヌキ *Nyctereutes procyonides*、アメリカミンク *Mustela vison* およびニホンイタチ *Mustela itatsi* の計21個体の寄生虫保有状況を検査した。その結果、アカギツネ、ノイヌおよびノネコの腸管から計5種の寄生虫が確認された。これらのうち、3個体のアカギツネから多包条虫 *Echinococcus multilocularis* が見つかった (寄生率15.8%)。直近に調べられた道内における平均的な多包条虫寄生率34.7%と比較すると低値であったことと、2000年にこの湿原で実施した野ネズミ類調査で多包虫は未確認であったことを考え合わせると、多包条虫がこの湿原に濃厚に存在する状況とは見なせないと考えられた。また、この湿原においてアカギツネからの吸虫 *Alaria alata* の記録は初めてであった。

キーワード：厚岸湖・別寒辺牛湿原、多包条虫、*Alaria alata*、アカギツネ

北獣会誌 63, 175～177 (2019)

厚岸湖・別寒辺牛湿原 (湿原) は、北海道根釧地方の別寒辺牛川流域に広がる約8,300 haの地域に優れた自然環境を残し、大半がラムサール条約 (特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約) の登録湿地に認定されている。この湿原を擁する厚岸町はこの優れた自然景観を保全しつつ、町民の安心安全な生活の確立と持続的な産業形成を試みている。この実現のため、同町では湿原学術研究奨励補助制度を制定し、湿原とその周辺地域の数多くの自然環境の研究が実施されている。今回、平成29年度の同制度を活用し、この地域に生息する中型哺乳類の寄生虫保有状況を調べた。

材料と方法

2017年7～11月、厚岸水鳥観察館において冷凍保存されていた交通事故死や有害捕獲されたアカギツネ (キ

タキツネ) *Vulpes vulpes* (19)、ノイヌ *Canis Linnaeus* (5)、ノネコ *Felis catus* (5)、タヌキ (エゾタヌキ) *Nyctereutes procyonides albus* (1)、アメリカミンク *Mustela vison* (1) およびニホンイタチ *Mustela itatsi* (1) の食肉目哺乳類 (肉食獣) 6種、計21個体 (カッコ内数字は個体数) を検索材料にした。アカギツネに関してはエキノコックス症感染の危険性を回避するため、酪農学園大学野生動物医学センターWAMCにて10%ホルマリン液に固定後、剖検した。この種以外の個体は解凍後に剖検した。蠕虫については肉眼および実体顕微鏡下で諸臓器の検査を行った。得られた蠕虫は70%エタノール液にて固定・保存した。蠕虫類同定の処理および観察方法は浅川¹⁾に準じた。

連絡責任者：浅川 満彦 (酪農学園大学獣医学群獣医保健看護学類 獣医寄生虫研究室)

〒069-8501 江別市文京台緑町582番地

TEL 011-388-4758 (獣医寄生虫研究室)、TEL 011-386-1111 (野生動物医学センター)

FAX 011-387-5890 E-mail: askam@rakuno.ac.jp

結果と考察

アカギツネ、ノイヌおよびノネコの腸管のみから計4種の蠕虫類が確認された(表1、図1)。外部寄生虫としてはフタトゲチマダニ *Haemaphysalis* 属のある種の幼ダニがアカギツネの体表上で確認されたが、1虫体はアカギツネの胃内容物から見つかった。しかし、今回の調査ではその他の肉食獣からの寄生虫は未検出であった。

杉原^[2]が示した北海道内のエキノコックス症媒介動物の統計データによると、キツネにおける多包条虫の寄生

率(検出率)は、昭和41年~平成28年が22.1%(うち平成28年のみでは34.7%)であった。今回は、アカギツネ19個体のうち3個体から検出された(表1)ので、寄生率は約15.8%となる。この値は杉原の報告^[2]に比してかなり低い。また、浅川の前回調査で野ネズミ類における多包虫(多包条虫の囊虫)は未確認であったことを考え合わせると^[1]、多包条虫がこの湿原に濃厚に存在する状況とは見なせないと考えられた。なお、杉原^[2]によると、全道の野ネズミ類での多包虫寄生率は2%未満なので、湿原においてはさらに低いであろうことも考慮しておくべきである。

表1. 厚岸湖・別寒辺牛湿原内で捕獲あるいは死体が拾得された肉食獣の蠕虫類保有状況

寄生虫/宿主	アカギツネ	ノイヌ	ノネコ	タヌキ	アメリカミンク	ニホンイタチ
総検査個体数	19	5	5	1	1	1
犬回虫 <i>Toxocara canis</i>	7	4	0	0	0	0
猫回虫 <i>Toxocara cati</i>	0	0	4	0	0	0
多包条虫 <i>Echinococcus multilocularis</i>	3	0	0	0	0	0
アラリア属吸虫 <i>Alaria alata</i>	1	0	0	0	0	0
チマダニ属のある種 <i>Haemaphysalis</i> sp. (幼ダニ)	2	0	0	0	0	0

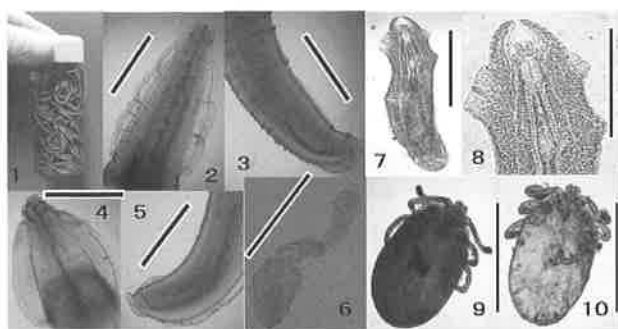


図1. 厚岸湖・別寒辺牛湿原内で捕獲あるいは死体が拾得された肉食獣から検出された蠕虫類

1~3; アカギツネあるいはノイヌから検出された犬回虫 *Toxocara canis* の濃厚寄生事例(1)、頭部頸翼および雄尾部(3); 4、5; ノネコから検出された猫回虫 *Toxocara cati* (ノネコ4)、頭部頸翼(4)および雄尾部(5); 6; アカギツネから検出された多包条虫 *Echinococcus multilocularis*、老熟片節内に虫卵無し; 7、8; アカギツネから検出されたアラリア属吸虫 *Alaria alata*、腹側からの全体像(7)および体前部拡大像(8); 9、10: アカギツネから検出されたチマダニ属のある種 *Haemaphysalis* sp. 幼ダニ、体表(9)および胃内(10)から検出された虫体。Bar; 2~5, 7, 9, 10=1 mm, 6, 8=500 μm

今回の材料にはノイヌとタヌキが含まれ、杉原の報告ではこれら両種においても多包条虫寄生率がそれぞれ1%と2~5%であった^[2]ので、今回のアカギツネの結果と併せて、今後、これらイヌ科哺乳類を対象に継続調査を実施する場合は、感染リスクを最小限にする防御措置が必須である。また、飼犬を放棄することにより、住民の健康に危険な状況を引き起こすことが明白なので、町民の方々への啓発は必須である。

今回、アカギツネからアラリア属吸虫 *A. alata* が検出されている。この吸虫は、Kamiya and Ohbayashi^[3]の報告以降、北海道内各地のアカギツネから頻繁に検出されるが、本湿原ではこれまで報告がなかった。

謝 辞

本調査は厚岸湖・別寒辺牛湿原学術研究奨励補助制度の助成を受けた。

引用文献

- [1] 浅川満彦：厚岸湖周辺の湿原における野ネズミ類の寄生蠕虫相、酪農大紀、自然、26、1-6 (2001)
- [2] 杉原義浩：エキノコックス症媒介動物対策の取組みについて、北海道獣医師会七十年史、28-29、北海道獣医師会 編、札幌 (2018)
- [3] Kamiya M, Ohbayashi M: Some helminths of the red fox, *Vulpes vulpes schlencki* Kishida, in Hokkaido, Japan, with a description of a new trematode, *Massaliatrema yamashitai* n. sp, Jpn J Vet Res, 23, 60-68 (1975)